

Ⅵ 総 括

1 縄文時代の落とし穴と袋状土坑

山口県内の落とし穴（第11表）これまで山口県内では、本遺跡を含む10遺跡33基の落とし穴が確認されている。今年度実施された防府市下津令遺跡F地区の調査でも落とし穴とみられる土坑を3基確認しており、さらに増える可能性がある。

県内の落とし穴の分布をみると、平野が少なく内陸部に盆地が多いという本県の地形の特質を反映して、多くは盆地周辺に分布する。丘陵や段丘上に立地する事例が多いが、山口市吉田遺跡や岩国市郷遺跡のように、河川や谷に面した湿地およびその付近に立地する事例もある。これは、狩猟対象とする獲物の習性に応じて、罠を仕掛ける場所を変更するなどの工夫をしたためといえる。

一般に、落とし穴は複数基が一定の配置をなして築かれることが多いが、これまで県内で確認された落とし穴は、調査範囲との関係から単独で検出される例がほとんどで、落とし穴猟における罠の配置とその戦略を考えるうえで良好な事例が少ない。その中で、岩国市郷遺跡は県内最多の17基の落とし穴が検出される良好な事例であった^(注1)。本遺跡の5基はそれに次ぐ検出数であり、落とし穴の配置をわずかながら窺い知ることができる事例となった。

落とし穴の形態と規模（第12表、第38図） 普遍的に存在する土坑の中で、「落とし穴」と認識できるのは、一般に幅が狭く、深さが1～2m程度あり、底面に木杭や逆茂木の痕跡とされる1個または数

第11表 山口県内の落とし穴検出遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	遺 構	基数	立 地	標高(m)	時期	文 献
1	下村遺跡B地区	美祢市伊佐町	SK08・SK09・SK14・SK16・SK24	5	河岸段丘上	87.7～88.3		本報告書
2	下村遺跡A地区	美祢市伊佐町	SK16	1	丘陵上	101.0		(財)山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センター 2007『下村遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第60集
3	小路遺跡	山口市黒川	Ⅱ地区第71号土壇	1	沖積段丘上(削平)	17.1	晩期	山口市教育委員会 1988『小路遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第27集
4	西遺跡	山口市黒川	H地区第1号土壇	1	尾根上	20.9	晩期	山口市教育委員会 1990『西遺跡Ⅱ』山口市埋蔵文化財調査報告第32集
5	寺内遺跡	山口市下小鯖	1号・2号落とし穴	2	丘陵中腹～裾部	74.2～74.6		山口市教育委員会 1995『寺内遺跡Ⅱ・七尾山古墳』山口市埋蔵文化財調査報告第54・55集
6	入野遺跡	山口市	No.18	1	丘陵斜面	50～60		同 上
7	吉田遺跡	山口市吉田	M-14区SK2・SK3、K17区Hトレ落とし穴	3	旧河川付近微高地(削平)	18.3～22.8	晩期中頃	山口大学埋蔵文化財資料館 1985『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、山口大学埋蔵文化財資料館 1988『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』
8	岡山遺跡	周南市安田	第20号土壇	1	丘陵斜面	57.1		山口県教育委員会 1987『岡山遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第99集
9	上久宗遺跡	岩国市周東町	SK-2	1	尾根上	78.3		山口県埋蔵文化財センター 1995『上久宗遺跡』山口県埋蔵文化財調査報告第174集
10	郷遺跡	岩国市本郷町	SK104・SK108・SK201・SK203・SK206～SK208・SK211・SK305・SK309～SK311・SK313・SK321・SK322・SK328・SK334	17	扇状地	192.5～194.0	後期	(財)山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 2004『郷遺跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第44集

第12表 下村遺跡B地区の落とし穴一覧

No.	グリッド 番号	遺構番号	標高 [m]	平面形	平面規模		底面形	底面規模		残存深 [m]	主軸方向	分類
					長軸(径) [m]	短軸(径) [m]		長軸(径) [m]	短軸(径) [m]			
1	L5	SK08	87.7	長方形	0.76	0.68	長方形	0.66	0.56	0.22	N-70° -W	Cb有
2	K5	SK09	87.8	長方形	0.79	0.66	長方形	0.68	0.61	0.32	N-15° -W	Cb有
3	K5～ K6	SK14	88.3	不整形	1.14	1.05	楕円形	0.84	0.77	0.62	N-61° -E	Ab有
4	J6	SK16	88.3	長方形	0.91	0.68	長方形	0.84	0.61	0.07	N-21° -W	Cb有
5	D7	SK24	88.0	隅丸長方形	1.39	0.84	隅丸長方形	1.27	0.74	0.54	N-82° -E	Ca有
6	-	H18 - SK16	101.0	長方形	0.95	0.65	楕円形	0.82	0.56	0.45	N-87° -W	Ba有

※ No.6は平成 18年度調査の下村遺跡 A地区の落とし穴である。

個の小穴が掘られるものである。底面小穴については、山口市吉田遺跡で検出された落とし穴のように、小穴内に木杭を固定するためと推定される複数の礫が詰められていた事例もある^(注2)。一方で、底面に小穴を残さない落とし穴もあることから、遺構全体の形状や埋土の状況、遺構の配列の状況、遺跡の立地、周辺環境などを考慮して判断する必要がある。

そういう意味で、本遺跡で確認した落とし穴のうち、SK08・SK09・SK16はいずれも後世の削平により底面付近を残すのみで大部分を失っており、土坑の深さや埋土の状況からは落とし穴とする根拠となりうる情報が得られなかった。しかし、底面に小穴をもつことに加え、付近に同様の遺構が複数基あり、かつそれらが標高約88.0mの等高線に沿ってほぼ配列すること、遺跡が段丘上で河川に面して立地しており、捕獲対象となる動物の生息に適した条件であることから落とし穴と判断した。

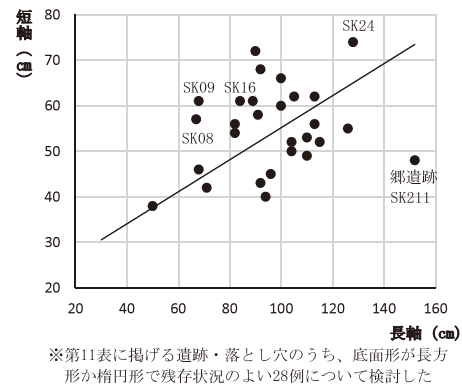
さて、本遺跡で確認した落とし穴は、形状や規模から3種類に分類できる。ここでは、縄文時代の落とし穴の検出数が3,000基を大きく超える鳥取県の大山北麓の研究事例に従い分類を考える。鳥取県大山町西坪中中畝遺跡では42基の落とし穴が検出されたが、従来の分類を踏まえ新たに形態分類案が提示されている^(注3)。すなわち、平面形は底面形を重視して円形(A)・楕円形(B)・長方形(C)・隅丸方形(D)の4つに、断面形は垂直形(a)・外傾形(b)・外反形(c)・くびれ形(d)・徳利形(e)・袋形(f)の6つに分け、さらに底面小穴の有無で分けた上で、各属性の組み合わせによって分類を行っている。

この分類にもとづく落とし穴の変遷をみると、円形系譜と長方形系譜は併行し、ともに次第に底径および容積が縮小していく。楕円形系譜は円形・長方形系譜の後に現れる。平面円形・断面徳利形・底面小穴なしのA e 無類が最古形式で、縄文時代前期末～中期初頭に比定される。その後、円形・長方形系譜ともに縄文時代中期以降、晩期までみられ、底面小穴を有するものが一般的となる。

もちろん、鳥取県の分類基準をそのまま山口県の事例に適用するには注意が必要だが、今後の県内資料の増加による再検討を念頭において、ひとまず上の分類に従えば、SK08・SK09・SK16はいずれも平面長方形・断面外傾形・底面小穴有でありCb有類となる。ただし、断面形は底部付近からの推定形である。SK14は平面が円形に近い不整形・断面外傾形・底面小穴有でAb有類となる。SK24は平面長方形・断面垂直形・底面小穴有のCa有類である。また、下村遺跡A地区でも落とし穴とみられる土坑SK16が検出されているが、平面楕円形・断面垂直形・底面小穴有のBa有類となる。

SK14のようなAb有類、すなわち平面円形の落とし穴は、管見のかぎり、県内で唯一の例である。ただし、円形の土坑として把握されるのみで、落とし穴と認識されない場合もあるので、吟味が必要である。このような形態的な違いは、時期差か集団差、対象とする動物の差によると考える。

また、第38図に示すとおり、県内の落とし穴のうち、平面形が長方形または楕円形のものの底面規模をみると、多くの場合、長軸が60～120cmでまとり、短軸が40～55cmの幅の狭いものと、55～70cmのやや幅の



第38図 県内の落とし穴の底面積

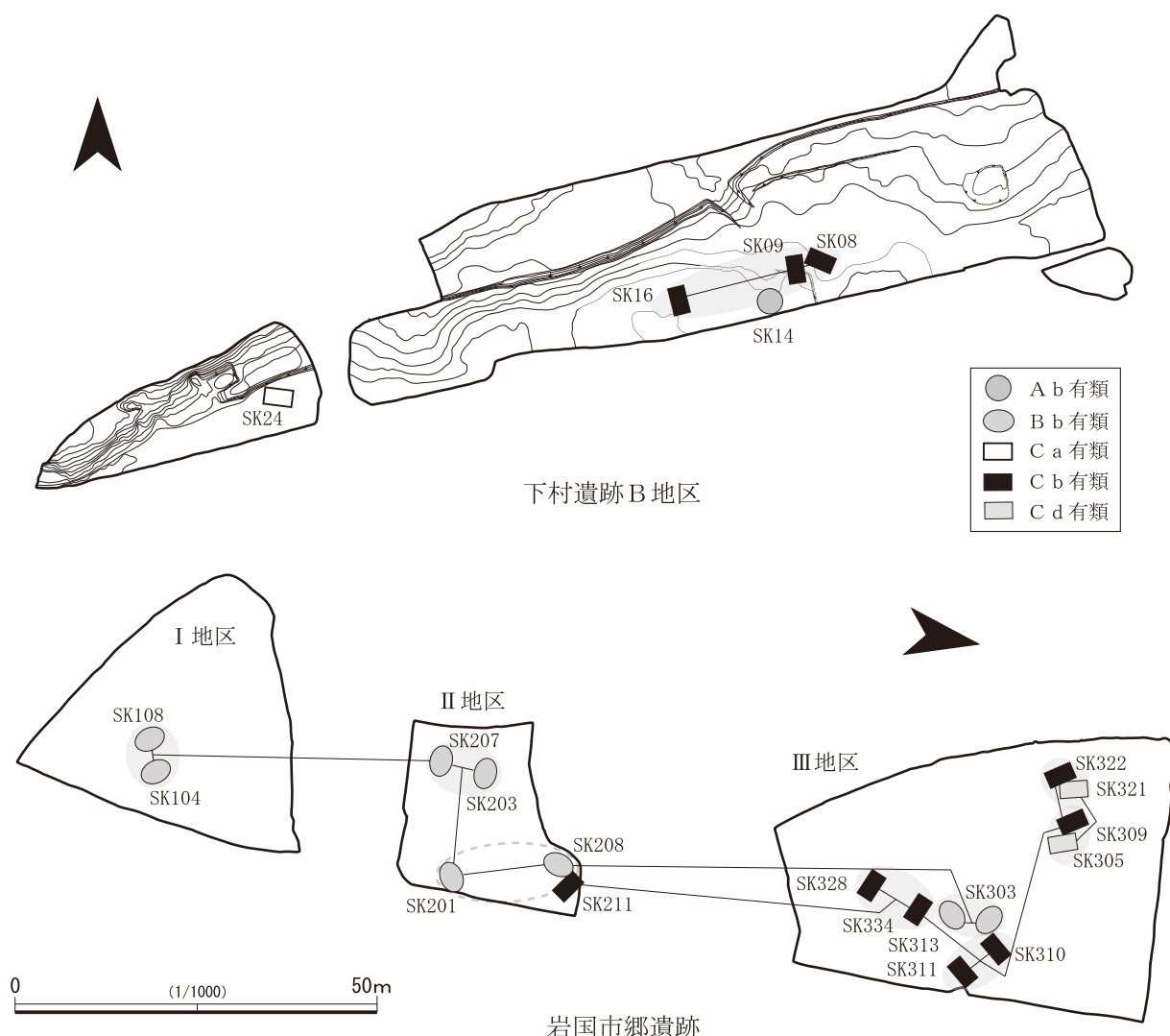
広いものの大きく2群がみられる。SK24は、幅の広い群と近いが、それらと比べても底面規模が大きく、容積も0.58m³と大きいものである。そして、底面小穴は建物の柱穴並みに径が大きく深い。このことから、SK24は、対象とする獲物が、他の落とし穴に比べて大型の動物であった可能性がある。

年代については、土器などの出土遺物が少なく、木杭など炭化物も残りにくい落とし穴で決定することは容易ではない。近年、鳥取県で行われている、底面小穴の埋土および埋土最下層から抽出した炭化物の放射性炭素年代測定の結果によれば、Ab有類とCb有類はともに縄文時代後期～晩期に比定されている。この年代と、本遺跡の平成18（2006）年度の調査で、晩期中葉の土器片が出土したことを踏まえれば、縄文時代後期～晩期のある期間に、この近辺で人々が生活していたとみて無理がない。よって、本遺跡の落とし穴は縄文時代後期～晩期と考える。

落とし穴の配置（第39図） 上の分類をもとに、本遺跡の落とし穴の配置をみると、SK08・SK09・SK16（Cb有類）からなる一群と、SK14（Ab有類）、SK24（Ca有類）の3ヶ所に分けられる。とりわけ、Cb有類の一群はSK08からSK16にかけて、N-73°-Eの方向で直線的に配列されており、各落とし穴の間隔は、SK08から順に3.0mと16.4mである。そして、SK08とSK09は2基一組で配置された可能性もある。これらは同形態であることから同時期に比定できるとすれば、獣道を意識して直線的に並べることで、動物を罠にかけける効率を高めようとしたと考える。一般に落とし穴罠の対象となる動物は、イノシシまたはシカとされるが、Cb有類のような直線的な罠の配列は、イノシシの逃走路を正確に把握した配列の可能性が高いであろう。

次に、先に述べた岩国市郷遺跡の落とし穴の配置について、上の分類に従い再考してみたい（注4）。郷遺跡は後期初頭～中葉の遺跡で、落とし穴かどうか明らかなでない土坑を除けば、Bb有類、Cb有類、Cd有類の3種類に分けられる。各種類の配置をみると、Bb有類とCb有類はそれぞれ同一類の2基を一組とし、各組ではほぼ主軸をそろえる。ただし、Ⅱ地区のSK201とSK208はそれぞれ調査区外にセットとなる落とし穴が存在する可能性もある。また、Ⅲ地区のSK309とSK305、SK322とSK321は、それぞれCb有類とCd有類のセットからなる群であり、異なる落とし穴形態が一つの群を形成する。

これらの形態上の差は、時期差や集団差、捕獲対象となる動物の差などと想定されるが、少なくともBb有類の群と、Cb有類・Cd有類の群の2群があり、この2つの群が同時併存したかどうかは不明であるが、それぞれの群に属する落とし穴はいずれも同時併存するまとまりであったと考える。そし



第39図 下村遺跡B地区と岩国市郷遺跡の落とし穴配置

て、2基一組で適度な間隔をあけて、Bb有類の群では直線的に、Cb有類・Cd有類の群では集中的に環状に配列することで、罠の効率を高めようとしたと考える。報告によれば、捕獲の対象とした動物として湿地（「ヌタ場」）を訪れる習性をもつイノシシを想定しており、対象動物が共通するとすれば、Bb有類とCb有類・Cd有類の両形態の差は時期差または集団差となろう。また捕獲されるイノシシは年齢階層の幅が広いことが指摘されており^(注5)、同じグループに属するCb有類とCd有類の差は、後者の断面形態がくびれ形で、より脱出しにくい構造であることから、たとえば前者がイノシシの子、後者が親というように、イノシシの親子を捕獲対象とした可能性もあろう。

このように、下村遺跡B地区と郷遺跡では、落とし穴の数のほか、郷遺跡が2基一組を徹底する点で違いがあるが、近い時期の遺跡であり、直線的に落とし穴を配置するという方法をとる点では、同様な原理で落とし穴罠を行った可能性があろう。

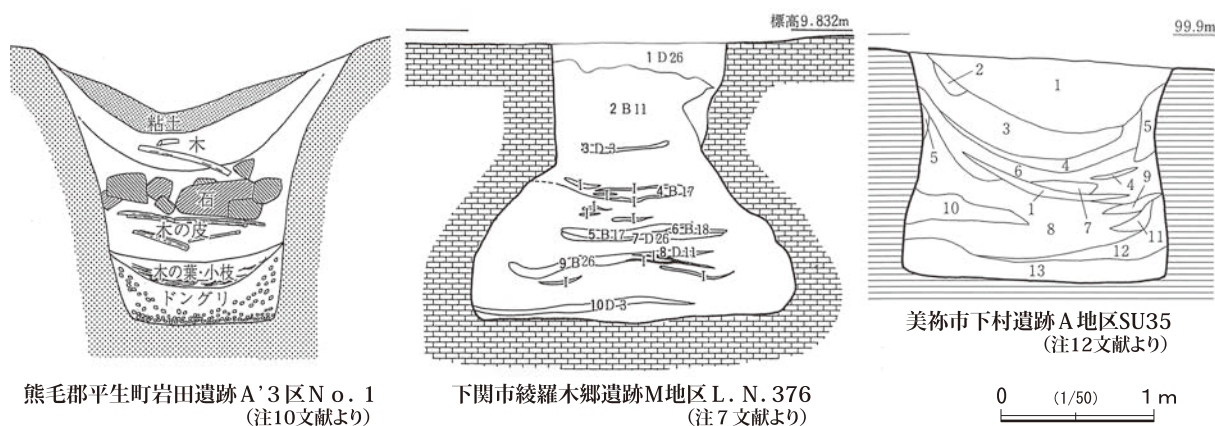
袋状土坑について（第40図） 県内では、多くの袋状土坑を確認しており、平成12（2000）年時点で34遺跡が報告されている^(注6)。下関市綾羅木郷遺跡では、1,000基近くの袋状土坑（袋状堅穴）を確認している^(注7)。袋状土坑の特徴として、①底面形は円形で、断面形は底部に比べて開口部の狭い「袋

状」を呈する、②規模は底面径が2 m、深さが2～3 mと大型である、③底面は平坦面をなす、④底面の中央に小穴、周囲に溝を設けるものがある、⑤埋土中からは多量の土器のほか、炭化物が出土するものがある、⑥複数の袋状土坑が群を形成する。これらの特徴をもつ袋状土坑は、いずれも弥生時代前期から中期を中心とし、北部九州から響灘沿岸にかけて分布する。その性格は貯蔵穴と考えるのが一般的である。

本遺跡の袋状土坑SK20は、底面形が不整円形を呈し、開口部の長径が0.54mで、最大径が1.40mであり、最大径に比べて開口部が著しく狭い。土坑の断面形は扁平な球形を呈するが、開口部から約0.20 m下位で急にすぼまり、開口部に向かってわずかに開きながら立ち上がる。深さは0.80mを測る。底面は平坦面をつくらず、袋状というよりフラスコ状を呈する。底面中央の小穴と、周囲の溝は設けられていない。ただし、図化していないが、中央より北側で小穴1ヶ所を検出している。埋土中から土器は一切出土していない。周囲に同様の土坑はみられず、単独で存在する。時期は不明であるが、埋土は褐色シルト主体で、周辺の落とし穴と類似する。このように、SK20は、先述した弥生時代の袋状土坑とは大きく異なる特徴をもつ。そして、その時期は縄文時代に属する可能性がある。

縄文時代の袋状土坑は、前期以降、東日本を中心とする高燥な台地上に分布するが、西日本では低湿地にカシやトチの実を貯えるための皿状や円筒状の貯蔵穴をつくるのが主流である^(注8)。熊毛郡上関町田ノ浦遺跡は海岸に近接した後背湿地に立地し、縄文時代後期の堅果類（ドングリ）貯蔵穴が14基確認されたが、いずれも断面形が皿状の土坑であった^(注9)。また、熊毛郡平生町岩田遺跡は海岸に面した小扇状地の末端に立地し、縄文時代晩期の貯蔵穴33基以上を検出したが、深さが1 m前後の円筒状と皿状の2種類があった。貯蔵穴の内部は、底にドングリ類を入れ、その上を木の葉や小枝で覆っていた^(注10)。これらは、湿地を利用した堅果類の水さらしの機能を併せもつ貯蔵穴である。本遺跡の袋状土坑は、形状のみならず立地からみても、この2例とは異なる。

一方で、弥生時代の袋状土坑のうち、下関市綾羅木郷遺跡のM地区L.N.376は弥生時代前期後半（綾羅木Ⅰ式）に比定されるが^(注11)、開口部が頸状に直立または外傾する点は本遺跡のSK24に類似する。しかし、底面が平坦面をなすこと、規模は開口部の最大径が1.37m、底面の最大径が2.13mで、SK24と比べてかなり大きいこと、多くの土器と石器を出土することなどからみて、やはり本遺跡例とは異なる。綾羅木郷遺跡の袋状土坑は、弥生時代前期末（綾羅木Ⅲ式）に基数が増加するとともに、規模



第40図 貯蔵穴と袋状土坑の例（断面形態）

がさらに大型になる。この地域に一般的な袋状土坑は、この前期末以降の動きとともに拡散するとみられる。本遺跡の約400m東方にある下村遺跡A地区は弥生時代中期初頭の集落遺跡であり、袋状土坑が検出されるが^(注12)、特徴からみてこの一般的な袋状土坑に含まれる。弥生時代以来の袋状土坑の起源を韓半島に求める見解もあるが^(注13)、本遺跡の例は、弥生時代の一般的な袋状土坑とは系譜が異なると考える。

以上から、袋状土坑SK24は、弥生時代の北部九州から響灘沿岸に一般的な袋状土坑ではなく、築造時期については、積極的な根拠は乏しいが、周辺遺構との関係から縄文時代晩期頃と考える。その性格は、埋土中から採取した土壌サンプルの花粉分析、および微細生物の洗い出しと分類・同定を実施したが、花粉化石や種実遺体は一切確認できなかった。しかし、その形状や立地からみて、貯蔵穴の蓋然性が高いと考える。

2 木炭焼成坑について（第41図）

本遺跡では、木炭焼成坑と考える土坑SK26を検出した。平面形は方形で、規模は長軸が2.10m、短軸が1.93mを測り、埋土中には炭と焼土を多く含んでいた。床面では木炭が塊状で出土したが、木炭の配置や積み上げ方法等は判然としない。時期は、放射性炭素年代測定の結果から11世紀前半～12世紀後半で、平安時代後期～末期と考える。木材の樹種同定の結果、カキノキ属やコナラ節等の広葉樹が使用されており、いずれも重硬で強度・耐朽性が高く、火力よりも持続性を目的とした硬い木炭を生産していたとされる。

このように、SK26は、積み上げた木材を燃やした後、土で覆って蒸し焼きにする、伏炭法（「伏せ焼き」）による製炭を行った土坑と考える。これまで県内では、同様な構造をもつ木炭焼成坑の例はみられない。一方、東北や北陸地方をはじめ、各地で類例がみられる。近隣地域の例として、福岡県太宰府市宝満山遺跡群のⅠ区では、窖窯型木炭窯と鍛冶炉または製錬炉のほかに、木炭焼成坑を含む焼土坑12基が検出された。そのうち13号土坑は平面形が隅丸長方形で、規模は長軸が1.75m、短軸が1.60mであり、時期は8世紀初頭に比定される^(注14)。鍛冶炉や製錬炉に併設されることから、製鉄に伴い製炭が一体的に行われていたとみられる。形状・規模ともにSK26に類似しており、木炭の使用目的を考える手がかりとなる。

福岡市脇山A遺跡では木炭焼成坑を含む焼土坑が80基以上検出された。そのうち、第3地点SX04、第19地点SX01など、木炭が放置された状態で検出された遺構が多く、木材の組み上げ方法が窺える資料である^(注15)。第19地点SX01の平面形が直径約2.1mの円形を呈するほかは、隅丸長方形を呈しており、規模は長軸が1.0～2.0m程度、短軸が0.6～1.2m程度で、大小がある。時期は、周辺から13世紀代の土坑や墓が検出されているが、はっきりしない。第3地点SX04と第19地点SX01の木炭の樹種同定の結果、前者がすべてカシ類、後者がすべてクスノキ科と判明している。木材の性質は、カシ類が堅硬で、クスノキ科が中程度の強さであり、いずれも火力と持続性が強い。

鳥取県西伯郡大山町下市築地ノ峯東通第2遺跡では、須恵器窯や製鉄炉、窖窯型木炭窯に近接して木炭焼成坑22基が検出されている^(注16)。平面形は円形・楕円形・隅丸方形・不整形があり、時期は、本遺跡のSK26と重なる11～12世紀を中心とする。炭焼窯11は平面形が方形に近い不整形を呈し、規